

◆ことしも終わろうとしている。一年を象徴する漢字が「災」と出た。自然災害が多く、民主主義の終焉だといわれるほど政治状況もひどかった。しかし、これで終わるわけではない。己が道を行くのみである。来年はどんな年になるだろうか。

◆親戚のきよのさんが百一歳で亡くなった。数え年でいうと百二歳の大往生。戒名には「瑞」の字がついた。なるほど、めでたいのである。十一月九日の葬儀の朝、いきなり三十七センチの雪が積もっていた。降る、降ると予報では言っていたが、ここ山形でも油断するほど暖かい日が続いていたから、起きてみて驚いた。喪主は六十代の孫だった。その挨拶に「サルド(サラダ)」ということばがあった。まさらかな雪は、まこと故人の旅立ちにふさわしい景色だという。きよのさんは他人に嫌なことはいわず、いつもにこにこして楽しい話をする人だった。生活の大変さは、もちろんあった。それでも清らかな性質のまま年を重ね、人生を終えたのだ。

家に帰って『やまがた「方言」歳時記』（矢作春樹著、東北出版企画、二〇一三年）を見たら、「サルド(サラダ)」の項があった。引用しよう。

吹雪に明けた朝、深い雪にうずもれた道を最初にたどるのは、ほんとうに難儀なものです。それが一筋の足あとであつても人の通つたあとを歩むのは、何かしら心あたたまる思いがしたものでした。

一面が積雪でおおわれて歩いた跡がない雪の原を方言でいろいろに言いますが、県内の分布はおおよそ次のようです。(図は略) 天童・山形・上山一帯にはその方言がありません。積雪が少ないからでしょう。

サラダやサルドの語源は、接辞サに、新のアラ、所のトが複合したものでしょう。またサラは、サラチ(新地)とかサラユ(新湯)からわかるように「まだ使っていないこと」を意味します。新雪の処女地のことなのです。

サラトを進み行くことを、サラトログと言いましたが、広島県山県郡中野でもサラテをコグと言っていたようです。ですからサラトは、もっと広い地域で使われていた古いことばなのかも知れません。

サルド、奥深いことばである。

(布宮慈子)

muninokai.com

上記のサイトでは、フルカラーのオンライン版「展景」を公開しています。

季刊展景 92号

二〇一八年十二月三十一日発行

編集・発行人 布宮慈子

制作 スタジオ・マージン

無二の会「展景」発行所

山形市上町二一ー七ー二〇一

info@muninokai.com